

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

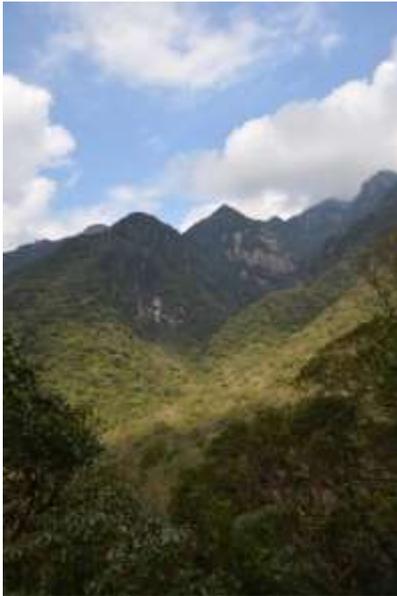
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 3 月 23 日	
所属部局・職	霊長類研究所・技術職員
氏名	橋本 直子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本・鹿児島県熊毛郡屋久島町
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
屋久島生息地研修
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 3 月 11 日 ~ 平成 26 年 3 月 14 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
澤田晶子特定研究員, 鈴木崇文技術職員 (京都大学野生動物研究センター)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
■目的
野生のヤクニホンザルにおける採食や社会行動を中心とした生態の観察を通して、霊長類の飼育環境改善のための一助とする。加えて、屋久島の豊かな自然環境に触れることや野生動物とヒトとの関わりについて知見を深めることを目的とした。
■同行者
澤田晶子研究員, 鈴木崇文技術職員, 兼子明久技術職員, 山中淳史技術職員
■日程
2015/3/11 ニホンザル観察 (西部林道) 澤田研究員による屋久島レクチャー (屋久島ステーション)
2015/3/12 ニホンザル観察 (西部林道) 鳥獣被害についてヒアリング (屋久島町役場 農林水産課) 屋久杉探訪と観光集中地域でのニホンザル観察 (安房~紀元杉)
2015/3/13 ニホンザル観察 (西部林道) 永田集落の二十三夜祭に参加
2015/3/14 自然休養林探訪 (白谷雲水峡) 帰所
■報告
1. 屋久島の自然環境
まれにみる大雪に見舞われた犬山を出発してから一転、屋久島の上空からは緑豊かな森林や山々を望むことができた。初めての屋久島滞在はほぼ全日程で晴天に恵まれ、自然が育む素晴らしい景色を堪能させていただいた。西部林道では低標高に分布する亜熱帯植物や豊かな照葉樹の芽吹きが間近で観察でき、さらに林の隙間から上を見渡すと、徐々に深い緑色となり 1000m 超の山頂部には積雪をも確認できた。また、白谷雲水峡の太鼓岩までの登山道では、ヤクスギやヒメシヤラの大木、倒木更新の様子、コケに覆われた湿潤な樹林帯に圧倒されながら歩いた。洋上アルプスの名をもつ屋久島における植生の垂直分布の様を目の当たりにし、あらためて自然環境が作り出す豊かな生態系の素晴らしさを感じた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

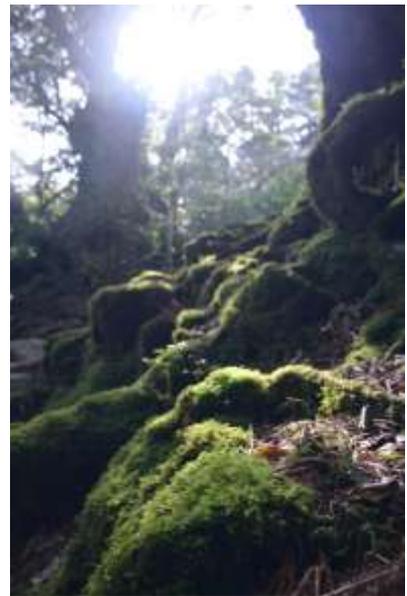
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



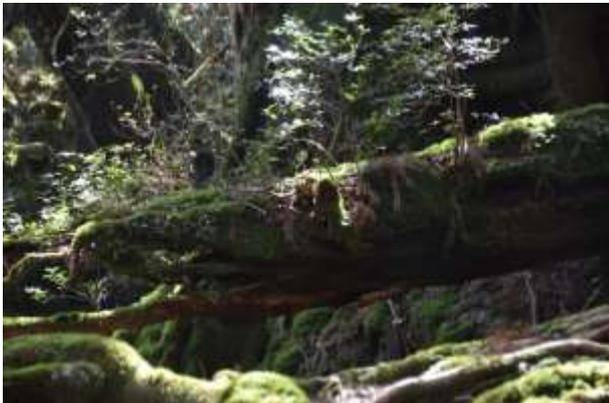
西部林道より望む
垂直分布の様子



低標高地帯で見られる
絞め殺し植物



豊かなコケ類



倒木更新の様子



永田集落から望む日没

2. ヤクニホンザルの観察

西部林道における調査では、3日間を通してのべ7群 80~90 個体に遭遇し観察することができた。遭遇した群はほとんどが 10 個体前後の小集団だったが、これは一群れの観察時間が短く一時的に離散している場面だった可能性もある。同行していただいた澤田さんによると、西部林道では 70~80 頭の大い群も遊動しているとのこと。野生のニホンザルのなかでもヤクニホンザルは生息域における個体密度が高いと有名である。このことは、屋久島の自然や植生が豊富だからこそではあるが、一方でケガを負ったサルも少なからず観察されたことから、闘争が多いこともうかがえた。

この時期は新芽も豊富で、タブノキのシュートを 15 分以上にわたって採食する個体や、ヒメユズリハの若い葉の葉脈だけをきれいに残して採食する姿が観察できた。また、朽木の樹皮をめくったり穴に手をつっ込んで、甲虫と思われる昆虫を食べる姿も確認できた。糞便は緑がかった良便が多くみられ、目視でも繊維質を多く含んでいることが確認できた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



タブノキのシュートを糞沢に採食する
アダルトメス



地面にたくさん落ちているタブノキの食痕
ヤクシカが二次的に恩恵を受けている



サルの糞便には大量の繊維質が目視できた



サルとシカは近接しても互いに落ち着いた様子



日当たりの良い場所でグルーミングする群れ



朽木を穿り採食するコドモたち

われわれが垣間見たサルたちの生活は、ほとんどが採食とグルーミングなどの社会的交渉だった。例えばある一群をフォーカルした朝7時～10時の間、わずか20メートル四方の範囲内でほぼ8割の時間を採食に費やしていた。飼育下では対照的で、放飼場でも15分程度で餌を食べ尽くしてしまう。また、昼間に観察したある一群では、一時間ほどずっとグルーミングに集中していたが特に過剰グルーミングによる脱毛などは見られず、いずれの場面も飼育下とのかなりのギャップを感じた。ただ、飼育下でこれまで私がエンリッチメントとして作ったフィーダーを使う姿と野生で採餌する姿には大差がなかったことは、励みとなった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



道路を選択的に利用しているのは日当たりの影響か



不安定な枝先でも気持ちよさそうにグルーミングする母子



ケガを負った個体もたくましく生活している

3. 野生動物とヒトとの関係

今回の渡航に際し、屋久島で問題となっているサルやシカによる鳥獣被害についても情報収集を試みた。湯本教授と親交の深い屋久島町役場の環境政策課の方に事前に問い合わせ、鳥獣被害対策を担当している農林水産課の方を紹介していただいた。滞在2日目の午前尾之間支所の、日高望氏、渡邊新氏、泊雄喜氏の3名にご対応いただき、過去数年間の鳥獣被害の現状と対策についてヒアリングをおこなった。平成16年からの調査で、サルによる被害額は年間3000万円以上で全鳥獣被害額の大半を占めていたが、近年は徐々に減少傾向で、代わりにシカによる被害額が増加しているとのこと。サルやシカによる被害対策としては、有害鳥獣駆除による捕獲ならびに電柵の導入により、ある一定の効果が得られているとのことだった。しかしわれわれが集落などで見かけた電柵は、破損や周囲の樹木から侵入可能といったメンテナンス不足も見受けられた。これは、集落人口の高齢化による人手不足なども影響しているようだ。追い払いなどの他の手法を用いた対策はなく、今後も継続的に捕獲と電柵設置を実施予定とうかがった。一方で、澤田さんによると、捕獲禁止区域である西部林道でも猟銃の使用が確認されており、研究者の身が危険にさらされていることに懸念を抱いた。



ヒトの存在に気づいて自ら近づいてくるサル
(ヤクスギランド付近)



車のボンネットに乗り威嚇するサル
(ヤクスギランド付近)

もう一点、ヒトと動物との関係で懸念を抱いたのは、野生動物に対する観光客のマナーと人的被害について

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ただ、役場によると、サルやシカのロードキルはほとんど報告がない一方で、サルが生活圏や観光地に出没して人的被害をおよぼすケースはあるそうだ。実際に、われわれも観光施設として有名なヤクスギランド付近の道中で遭遇したサルの一団は、ヒトの餌付によりいわゆる観光地化してしまったサルだということは自明であった。サルを発見してから数十メートル先で車を停めたにもかかわらず、自らサルがスタスタと走り近づいてきて目の前で座ったことには驚いた。西部林道で観察したサルとは明らかにヒトとの関係性が異なっていた。西部林道ではヒトの存在はほとんど気にする様子もなく、こちらがうっかり近づきすぎない限りは威嚇する様子もなかったが、ヤクスギランド付近のサルはヒトに対して自ら近づき、餌を要求して怒りを露わにし、しまいには車のボンネットにも平気で乗ってきた。ただ、この両ケースを目の当たりにしての印象は、飼育下のサルたちは後者に近いこと、すなわち餌で引き寄せられるが捕獲などのディスターストも受けており一定以上の心的距離が縮まらず常に緊張状態が続いているのではないかということである。このことは当たり前ではあるが、飼育下では可能な限り強制的な捕獲や追い払いを払拭し正の強化トレーニングに力を注ぐ必要性をあらためて実感した。一方で、屋久島における観光客によるサルやシカへの餌付禁止については、さらなる周知の必要性が感じられた。



ヒトに対して威嚇するサル
(ヤクスギランド付近)



ヒアリングをおこなった
屋久島町役場尾之間支所にて

4. 地域交流

滞在3日目の夜に、ステーションがある永田集落でお祭りが開催されるということで急遽参加させていただいた。二十三夜祭といって、成人への一步を祝う伝統的な祭りとのこと。過疎などの理由から一度は廃れてしまったが、昨年に有志で復活させて今年二年目でかなりの盛り上がりとなった。500人程度の集落のうち100人もの参加だったとのこと。われわれも地域の方々とお話する機会がもてとても楽しい一夜を過ごした。また、澤田さんは屋久島調査に入る際は毎回お世話になっている地域の方々へご挨拶されて日々良好な関係を築かれている様子だった。屋久島はサルだけでなくウミガメなど野生動物や自然環境の研究拠点として重要であるが、地域の方々の協力や理解があってこそ継続できることを忘れてはならないと実感した。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



永田集落でおこなわれた二十三夜際では
伝統的な亀の子踊りが披露された



地域交流には約100名が参加し盛大な宴となった

5. 飼育環境の再考

今回の生息地研修を通して得られた情報や体感、醒めやらぬうちに日常業務である霊長類の飼育にフィードバックさせている。これまで取り組んできたフィーダーを用いた採食時間の延長や餌品目の調整などで採食環境をより豊かにする試みも継続していきたい。西部林道で遭遇したヤクニホンザルは、オスでも妊娠個体かと目を疑うほどふくよかで、特に採食後の腹部は想像以上に膨れていた。単に栄養バランスとカロリー摂取を目的とした固形飼料だけでなく、行動的採食欲求を満たせる品目についても検討したい。

さらに、飼育下では捕獲によるディスターブがヒトとサルの軋轢をさらに助長してしまう。現在はよりストレスの少ない捕獲方法の検討を続けており、その一環で放飼場での集合率の変化をモニタリングしている。正の強化トレーニングの重要性もより一層認識が高まった。加えて、サルの飼育環境を再考するうえで社会的刺激の補填はおそらくもっとも重要な要素であることを再認識できた。難しい局面もあるが努力を続け成果をフィードバックできればと強く願う。

■謝辞

このたびの屋久島生息地研修はPWSリーディング大学院の助成を受けました。松沢哲郎教授、湯本貴和教授をはじめとする関係者各位に心より感謝申し上げます。貴重な情報を提供いただきました屋久島町役場農林水産課の皆様、永田集落にてご厚意いただいた皆様にも厚く御礼申し上げます。



太鼓岩より絶景を望む

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6. その他 (特記事項など)